

Title	慶応義塾と歴史哲学
Sub Title	On Mita Philosophy Society and Myself
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲学 No.91 (1990. 12) ,p.55- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Essay
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶応義塾と歴史哲学

名誉教授 神 山 四 郎

慶應の文学部は大正7年(1918)大学令の発令と同時に「歴史哲学」の講義を置いた。日本の大学で始めてだが、当時欧米でも歴史哲学を正規の科目とする大学は珍しい。その頃出たドイツの哲学の文献目録には、S. Tanaka が日本で初めて歴史哲学の講義をした、と書いてある。田中萃一郎教授の発想だが、講義は哲学の船田三郎に委託した。船田は同11年歴史哲学研究のためにドイツに留学し、帰国後歴史哲学の講義を生涯つづけた。東大の人も歴史哲学のことは慶應へ聞きに行ったという。船田教授の講義は一時哲学科と史学科の必修科目になった。

昭和15年(1940)旧制法学部予科にいた私は三田の本科に進むとき同級の加藤道夫といっしょに文学部へ移った。加藤は英文科へ行ったが私は史学科に入った。しかし西洋の歴史を詳しく勉強するというより、漠然としてだが歴史の中に一貫して流れるものがあるのを勉強したいと思って青木巖先生に相談したところ、それなら塾には船田先生という歴史哲学の大家がいるからこの先生に就きなさい、と言われて転科を決意した。それ以来私は船田先生に習い、先生の後を継いで40年間、慶應で歴史哲学を教え、研究した。

助手に残してもらった時は太平洋戦争の末期、絶望的な日本の現実の中で歴史を超越する歴史哲学を学ぶことは生き甲斐でもあった。戦後まもなく、戦災に遭い病に倒れた船田先生の代わりに代講するよう命ぜられたので病床に報告にあがったとき、先生は私に向かって、歴史哲学は歴史と哲学という全く違うものに関わるから難しい学問だよ、と言われた。その難しさを私は生涯味わった。しかし慶應のような自由な大学だからこそそう

いう今の言葉でいう学際的研究ができたのである。ある時東大の林健太郎教授が、慶應は歴史哲学だけで一人の教授を置いているのだからいいね、と羨ましがりに言われたのを覚えている。

よく思い出すのは助手時代のこと、病気で戦争に行かなかった私は療養かたがた勉強を続けることができたが、その代わりさんざん空襲を食らった。毎週船田先生のお宅へ通ってランケ、ヘーゲル、フィヒテ、カントの諸著を読み進めていたのだが、戦争も末期になると米軍の艦載機が飛来して、無防備の市民に無差別に機銃掃射を浴びせた。米兵はまるでアフリカの原野で逃げまどう動物の群れを機上から撃つような快感を味わったに違いない。先生と私は国民服にゲートルを巻き、鉄カブトを脇に置いて、防空壕の入り口に机を置いて、そこで勉強した。その時は H. Nohl, *Hegels theologische Jugendschriften* を読んでいた。突如サイレンが鳴り、敵機襲来となると急いで穴の中にもぐり、飛行機が行ってしまうと、のこのこ出てきてまた先きを読んだ。まるで浜辺のカニみたいですね、と言うと、先生はにやにやしておられた。

先生亡き後しばらくして私は「史学概論」も教えなくてはならなくなっただけで認識論の方に研究対象を移したが、私にとっては歴史の形而上学の方がこの思い出とともにいつまでも頭の中にこびりついているのである。